

## 蛇行と螺旋、そして希望の合図 「まにまにまた、」に寄せて

白田（不知火） 涼太

今回の公演後に、「劇評を書いてよ」なんて言われたものだから、なんとか取り組もうとした。しかし「劇評」と言うと偉ぶった「センセイ」みたいなイメージがちらついて、どうしても性に合わず書きにくい。なので、パーソナルな話に引き寄せ、今回の公演に対してアンサーめいたものを書いてみた。長いと思うかもしれない。というか、間違いなく思う。でも、都会にいるみんなと違ってなかなか会って話す機会がない。だからこの文面で持って、久々にみんなとお話しがしたい。なるべくわかりやすく書くことを心がけるからどうか許してほしい。

.....

少し前に山形の実家に帰った時、街に出ると昔ドラッグストアがあったところが新しい斎場が変わっていた。昔からあるスーパーマーケットはかろうじて生き残ってはいる。かつては小さいながらもフードコートやゲームセンター、本屋もあり、夏になれば屋上の駐車場で縁日も開催されていた。いまやその一切が無くなり、建物の敷地の半分が100円均一になっていた。そして、その一角に「高く買い取ります」が売り文句の貴金属買取の店舗も併設された。

街全体で「終活」が進んでいる。

街を一望できる小高い丘に登って大きく息を吸うと、空気になにか埃のような、煙のようなものが混じったのを感じ、思わず咳き込んだ。

私には、地元に対する愛情がない。家族・親戚に愛された記憶、実家という安全な場所に対する愛着はあるが、この街に対してはそれがない。幼少期に世間知らずの子供同士の無邪気で残酷な言葉で大きく傷ついた記憶の方が大きく、むしろこの街を憎んですらいた。私は東北を出たくてしようがなかった。両親や親戚には不自由なく育ててもらったはずなのに、それでも埋まらない私のコンプレックスの正体は「田舎」だった。モノの有無、情報の鮮度・量、カルチャーへの感度、どこか押しつけがましい「幸せ」、冬になるとドカ雪で閉鎖・断絶されるようなあの感覚……。とにかく東北を出たい一心で大学受験に取り組むも目標に届かず、私は山形のお隣・仙台の大学に行くことになる。大学で東京出身の同期に出会くと、「東京都出

身」という肩書が彼の生まれ持ったギフトとして異常な輝きを放って見えたと同時に、「なぜわざわざ東北に？」という疑問が沸き起こったのを思い出す。その同期は「いや、東京といっても市の方だから。」と謙遜して言った。こちら「町」だぞ。生まれた時から蒙古斑のように、住所に「字（あぎ）」が入ってるのを見たことあるのか、アンタ。

就職活動時には仙台から東京に出るため、毎週のように夜行バスに乗って東京での面接に臨むも、最終面接手前での不合格が続く。面接で一緒になった東京の学生と、「トーホグ」からお上りしてきた私とでは学生時代の体験の量・質が違った。当時出会った東京の学生は、入学して早々に就活を意識した活動、人脈形成、趣味、エピソード作りに取り組み、学生同士の就活対策コミュニティで情報交換を盛んに行っていた。ある東京の学生は面接で、学生時代にチームを率いてクラブイベント自主開催したエピソードを語ってた。帰り道に面接グループで一緒になってカフェに寄ったが、そのイベントの実態は、詳しくは書けないが相当「下世話」なものだったようで。帰りの夜行バスで私は「モノは言いようだよな。」と独りごちたのだった。当然、その会社の面接は落ちた。

東北の大学周辺のたかだか小さいコミュニティの中で演劇活動して、小さなことで挫折して、中国・台湾・香港映画や、テクノポップや古いロックなどの音楽にのめりこんだだけの私では、都会の人間にハナから敵うわけがない。どれだけいい大学であっても、真面目に授業に出てたとしても、だ。やがて就活のエリアを東北に切り替えたことで、仙台で就職することになるわけだが。

努力を怠った意識はないし、都度ベストを尽くしたつもりだが、どうやっても自分は東北という場所に引き戻されてしまうみたいだ。見えない力が「動くな、お前さんはこつちだ」と言つて、盤上の私を大きな指で摘まんで北のほうに引き戻す。

その就職活動が終わって大学卒業を間近に控えたころ、私は山形の「劇団のら」の公演に参加することとなる。

私は高校の頃に始めた演劇を、大学の途中で辞めていた。当時の仙台の演劇は東日本大震災から間もなかったこともあって、全体的に表現活動そのものに迷っているようだった。自分たちが今の東北に対して言えることは何か。その葛藤、チーム内でのフリクションがもたらすストレスで、明確な「メッセージ」を表現することを避けていたように思えた。その為すすべのなさから、仙台で演劇に関わる人、仙台の演劇界そのものが「絶句」していたような気がする。それゆえ、観る側に解釈の一切を委ねるような「コンテンポラリー」な作風の潮流が仙台に根付き始めていたのだと、今なら理解できる。

が、私はその流れに居場所を失い演劇活動を辞めてしまう。とどのつまり、私は高校演劇時代の幻影を追っていたのだ。当時の仲間たちで稽古場でふざけながら、スクラップアンドビルドを繰り返して作った舞台。肋骨が痛むくらいに心から笑ったのは、その高校演劇時代以降ないかもしれない。大学生当時、高校演劇経験者ということで、「幼い」「青臭い」イメージがあつたのか、一部の人間からはどこか下に見られていたような記憶もある。

辞めて以来、演劇はもちろん流行りのドラマや映画の一切を避けるようになり、仙台の演劇界隈の人間とは一切の連絡・交流を絶った。演劇関連のVHSやDVDをすべて後輩にタダで譲った。その穴を埋めるように中国・台湾・香港映画や音楽に傾倒したわけだが。

それまでの私はずっと舞台に関わって生きていくものだと思っていた。高校で演劇を始めて、だんだんと知り合いも増え希望にあふれていた。それがあつけなく終わった。決断したのも自分だし、受験や就活で「足りなかった」のも自分が原因なのもわかつてはいるけれど。

どんなことにも始まりがあれば終わりもあるのだ。

その中で参加した、劇団のらの公演「ジグザグ」。私の中では、舞台に対してケリをつけるつもりだった。劇団メンバー大半が高校時代の顔なじみ。希望にあふれていた頃に出会った人たち。それゆえ久々に顔を合わせるにあたって、少々惨めな気持ちもあつた。

「ジグザグ」は短編作品集で、私が関わったのは2作品。その中で演じたのは、葬式を終えた喪主の父親の役、ビンタされる老人の役。「ケリをつけるつもり」で参加した舞台で喪主の役つてのも何ともうまくできた話だ。ビンタの衝撃は今も残っている。張り手というよりは、掌底で意識を持つていかれる感じ。

実のところ、本番の舞台上の記憶はあんまり残ってない。(件のビンタのせいなのか?)それよりも、会場の建て込みや照明のシユートが完了して、休憩中に舞台が空いているときに演じた一人芝居の記憶の方が残っている。偽外国語で日本の漫談を演じるというもの。タモリの本物の芸に何度もダビングを重ねたような、超劣化版。客前ではないが、袖にいる旧友たちは笑ってくれてた気がする…。

やがて私は就職し、劇団のら及びメンバーはそれぞれ活動を続ける。お互いにやああって、のらのメンバーの一部は東京に進出。東京で芝居するという夢を叶えるために。今思い返してみれば、彼・彼女たちの東京進出の話を聞いたこの時、私にとっても岐路だったのかもしれない。東北に残るか、東京に出てみるか…。人生に

はいろんな岐路がある。私たちの人生は、常に右か左かを選び進み続ける「ジグザグ」の軌道を描いている。私はその時、違う道を選び取る勇気がなかったのだ。そこから何度か東京での公演に観劇しに行ったこともあるが、それぞれの活動、メンバーのプライベートの変化もあり、劇団のらとしての公演の知らせはなくなっていた。

どんなことにも始まりがあれば終わりもあるのだ。

そうこうしているうちに世の中はコロナ禍となり、街は停止を余儀なくされた。

そんな最中、「ジグザグ」の公演メンバーが亡くなったと聞かされる。

年が明けたばかりの、未だ世界の行く先が見えない、寒い冬の日のこと。

自分よりも年下で、二十代の若さで亡くなったことに強く胸が痛んだ。当時の世の中のムードも、その感傷を加速させた。ほんの一瞬のお付き合いだった自分さえ精神的にかなり堪えた。より立場の近かった家族、劇団メンバー、彼女の親友の気持ちは到底想像できない。

コロナ禍であらゆる人間関係が希薄になっていく中、2023年ごろ、自分は仙台から東京に旅行する折、劇団のらメンバーの伊藤穂、矢萩慧に再会した。食事しながら他愛もない話や、占い師と助手の設定のエチュードなどをやってふざけた記憶がある。やはり役に入ってふざけるのは楽しい。その際に伊藤穂から、亡くなったメンバーの追悼公演の構想を聞いた。

その公演が、今回の「まにまにまた、」である。

長いでしょう？

続きを読む？

読まない？

これもまたあなたの岐路。「ジグザグ」のうねりの一つ…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この公演は「若くして亡くした仲間の『東京で舞台に立つ』夢を叶える」という裏テーマが設けられていたが、西荻窪の劇場は、シリアスでもウェットでもない、非常に和やかな空気が流れていた。受付には顔なじみの高原拓也、演出のアベユウスケがいた。私はコロナ禍前以来でどんな表情で会えばいいかわからなかった。だが、軽い冗談を交わしあううちに妙なこわばりは解け、一気に当時に戻ったようだった。客入れBGMの大槻ケンヂのアコースティックアレンジ曲も粋だった。選曲の一つ「テレパシー」にも、何か意味を感じずにはいられない。

やがてBGMのボリュームが上がって場内が暗転すると、照明に照らされた女四人の姿が。伊藤穂、矢萩慧、鈴木志麻、花奏和音。私はこの並びを見て真つ先に「ジグザグ」内の短編作品「女の子ビュッフェ」を想起し、話が進むにつれて、互いに纏れていく様を見て「らしいな」と思っただけでニヤついていた。

「女の子ビュッフェ」は伊藤穂の代表作の一つともいえる作品。たしか他の劇団がこの脚本に惚れ込んで上演していた記憶がある。

ここでようやく「劇評」めいたことをしようと思う。伊藤穂の作家性に触れてみる。伊藤穂という作家は、女性特有のホモソーシャル※を描く人だ。（※注…ホモソーシャル【英: homosocial】とは、恋愛或いは性的興味を伴わない同性間関係を意味する社会学用語。[wikipedia]）彼女の代表作「女の子ビュッフェ」はその最たる例。

彼女の作品における女たちは、お互いあるいは男という生き物に対する冷酷な眼差しを持ち、煮えたぎった情念を火の玉ストレートのような言葉で応酬する。

「ガールズトーク」なんて生ぬるい言葉で括ろうなんて思ったら、大やけどする。一方で、作中に登場する男たちは馬鹿さ、やさしさ、時に可愛らしさを伴って、女たちの周辺をぐるぐると回りながら存在している。男女の根本的な違いを対比的に見せる存在として、女たちの存在を引き立て、作中・作品の背後の人間関係をより立体的にする機能を果たしている。

彼女は過去の体験や、周辺であった出来事、それによって巻き起こった感情など、彼女ならではのパーソナルなものを何度も捏ねて、伸ばして、磨いて、作品を作り続けている。同世代の女性として本来体験しなくてもいいようなこともあっただろうが、もはやこれらは脚本家として与えられたギフトだろう。男女を俯瞰で眺めて、女の目線で語るその達観ぶり。常連の偉いおじさんが毎夜集うスナックのママ的な存在かもしれない。

その後、東京進出後に新作（短編「ヒューマンエネルギー」など？）をいくつか観た。自分の観る限りでは、作家としてあるいは劇団として試行錯誤している印象

があつたが、今回の「まにまにまた、」で彼女が原点に戻つたような気がした。それでいて、登場人物同士が纏れた関係の果てに互いを許しあい、無理に決着付けずに時の流れるまにまに、傷・記憶を癒していく姿に作家としての大きな変化を感じた。この数年の間に、彼女は先述の女性ホモソーシャルを土台にした達観した目線の他、現在から過去をも俯瞰する新しい視点を得たのかもしれない。

これまでのスナックの「ママ」的な視点から、この先、愛する子供にとっての唯一の「ママ」としての視点を得たら、一体どんな作家になるのだろうかと思う。おとぎ話の皮をかぶりながらも、ハードなテーマを描くのだろうか…。

矢萩慧、鈴木志麻、花奏和音、この三人の女優達もそう。台本ではある程度の当て書きはされているかもしれないが、それぞれの演技に、これまでの生活や体験そして仲間の喪失等々が投影されていて、役者としての奥行きはもちろん、一人の人間としての成長・変化を感じた。花奏和音の流石の安定感。芸名の「和音（わおんコード）」の通り、その演技で作品に調和・安定、時に不安定なムードを作っている。矢萩慧が持つ独特のやさぐれ感は「ジグザグ」の頃から変わっていない。むしろそのやさぐれ感が今の年齢にマッチしていた。そして今回のメンバー唯一の東北在住者である鈴木志麻のコメディ由来のテンポ感。役者としては8年近くブランクがあつたらしいが、全くそれを感じなかった上、何故今活動していないのかと思つた。みんな脚本家や役者である以前に、一人の人間なのだ。生きて経験したこと以外は、芯から表現できない。どれだけ人気、容姿、華、テクニックを持ち合わせた役者であっても、人間としての奥行きを一瞬のうちに見透かされる事もある。

そして登場人物間で織りなされる、地方と都会のコントラスト。

地元に残り続けて日常をこなす人たち。生まれ故郷を愛することもあるだろうが、この町に生まれたばかりに家族の面倒などのしがらみで離れられなかったり、上の世代から無意識のうちに押し付けられた「幸せの基準」にとらわれて結婚し出産を急いだり、その急いだ結婚生活の中でほころびやすれ違いが生じたり、時代遅れな町で、人がどんどん減っていく中で、為すすべなく自分の無力さを知って絶望したり。それでも嫌いになりきれず、どうにか理由をつけて、この地元に住み続けたり。

一方で、そんな地元如若いうちから嫌気が差して、本当の自分を探しに都会に出る者もいる。漠然とした幸せ、無鉄砲な志、金銭的な大成功、「Wikipediaに載りたい」程度の夢などをそれぞれが抱きながら。それでも大半は都会の人間になれたことで満足しきって、当初の想いを忘れていく者が殆ど。やがて都会で安定した仕

事に就いて、都会のビジネスの荒波に揉まれ、人生を見つめ直した挙句、バツの悪い表情で地元に戻ってくる者もいる…。

今回の唯一の東北在住である鈴木志麻の演技を見て、私たちが東北で見たいろんな人生が想起された。

また、私にとってはとても懐かしい存在である柳木斎希。希望に満ちた高校時代の仲間の一人。彼とは数年前の劇団のらの東京公演の客席でニアミスした程度で、しばらく会話らしい会話をしていなかった。たまにSNSで流れてくる情報では、函館、山形（たまに仙台）、東京の公演に関わっていたりと、私はその行動力と資金源に常に疑問を抱いていた。

舞台上の彼は、いい意味で高校時代からまったく変わっていなかった。体形、声、台詞のない時の微細な体の揺れ、今作でのカラオケのシーンでのフェイントのかけ方など。それでいて、高校時代から持ち合わせていた華を感じた。当時から舞台上はもちろん、日頃の稽古場から「何かをしでかしそう」なワクワク感を備えた、おもちや箱のような人だった。何かをしでかしそうで何もしない「ハズし」にかかる場所もあって、そこもまたおもちや箱のようだった。

今作「まにまにまた、」では、話の舞台の町の名前にもある通り「螺旋」がモチーフの一つになっている。

それで思い出した話がある。「人生は螺旋の軌道を描いている」ということだ。通常、人生は不可逆な一直線上で、過去から未来の時間の軸に沿って進んでいると思うだろう。しかし、ふと気づくと過去に経験したような同じ出来事、同じ場所、悩みに戻っていることがある。人生経験を積んで階段を上ってはいるのだが、真上から俯瞰すると同じサイクルに戻っている、つまり人生は螺旋を描いている…。そんなことを、敬愛する細野晴臣が言っていた。（出典…「細野晴臣音楽の軌跡〜ミュージシャンが向き合った3・11」NHK ETV 2011年5月29日放送）確かに、時間に関するものは円形・環を描くものが多い。時計、占い、太陽・月・惑星の軌道、四季の「巡り」、木の年輪などなど探してみると結構ある。

一方でさつき、「私たちの人生は、常に右か左かを選び進み続ける『ジグザグ』の軌道を描いている。」と言った。私たちは何度も同じことで悩み、都度選択して生きている。時にその悩みの根本を見て見ぬふりして、無鉄砲な決断や選択をしたりもする。後悔しない素振りを装って。日々ジグザグに蛇行している私たちは、実は長い目で見ると大きな螺旋を描いているのかもしれない。

私たちは年を重ねるたび、否が応にもいろんなものを手放していく。手放しの過程で、次第にジグザクの蛇行は落ち着き、だんだんとその人の「あるべきところ」に落ち着いていく。歳を重ね、ライフステージの変化に伴って、日々の雑事に追われるうちに体力は落ちていく。身体のアチこちが痛くなったり、健康診断の数値を気にして、できることも限られていく。日々を懸命にやり過ごしていくために、私たちは無意識のうちにジグザクの蛇行を避け、だんだんとシンプルな答えを求めていく。シンプルな軌道で人生の螺旋を描くようになる。「年を取って楽になった」「若いころに何であんなことにこだわってたのだろう」というのはよくある話。

そして、その螺旋の軌道が最終的に向かうところは、言うまでもなく「死」である。その時には、現金もスマホも、積読もCDも大事なギターも全ては持つて行けない。棺の広さには限界がある。家族や仲間も連れていくことは出来ず、置いていかなくてはならない。私たちは、その一点に向かって余計なものを手放しながら生きていく。

どんなことにも始まりがあれば終わりもあるのだ。

「死」と言えば、今作中の終盤で葬儀を終えて献杯するシーン。あれは大きな手放しの通過儀礼だ。言ってしまうえば、今作はこの献杯のシーンのためにあつたと言っている。

母の死、その母の店を畳むこと、木工職人の道を諦めることなどはもちろん、一夜の事件によるわだかまりを経て互いを許していく様。これも一種の手放しだ。そして、その手放しと同時に、結婚して新たな暮らしが始まること、夫婦の関係を見つめ直すことなど、新たな始まりや希望を予感させている。

矢萩慧が演じるミナが「新たな船出に献杯！」と言ったとき、私は思わず拍手をしていた。かつての劇団のらのメンバー一人一人がずっと頭の中で引つかかり、絡まっていた、喪った仲間の無念にも果たせなかった夢。この公演で叶えることが、彼女たちにとって、大きな手放しなのだった。仲間を忘れるためではなく、けじめをつける過程で遺された者同士で「消えないもの」を確かめ、それを携えて未来に向かうために必要な儀式。舞台上の彼女たちには、この公演が終わってしまう名残惜しきを感じたのだが、それ以上に大きなカタルシス、希望を感じた。それゆえ私の心から拍手がこぼれ出たのだった。

さらにこの葬儀からの献杯のシーンの前に、鈴木志麻演じる志保が、ナライの木に「みんなが幸せでありますように」と祈っていた。鈴木志麻は喪ったメンバーの無二の親友だ。この台詞は彼女だからこそ言えたのではないか。この台詞を皮切りに以降のシーンで時系列が未来に移り、先述のあらゆる手放しが起こる。作中の各登場人物として、役から離れた仲間・親友として、そしてその場に居合わせた客席の一人一人が未来に歩を進めるための「希望の合図」を、彼女に言わせたのではないか。どの道を選んでも、最後にはきつと笑えるようにと。

手放すこと、それと表裏一体で訪れる希望だつてある。

そう、どんなことにも「終わり」があれば「始まり」もあるのだ。

観劇後、メンバー一人一人と談笑した。実際に一人一人からは、感傷に浸るでもなく、清々しきを感じた。久々に会話するメンバーが大半だったが、その会話の空気は「ジグザグ」公演当時の延長線上のものだった。

舞台袖に通されると、そこには満面の笑みの吉田有紀がいた。毎度タイミングが合わず集まらない、本当におつちよこちよいな役。本当にみんなに愛されて、いい役をもらったね。あなたはちゃんと舞台に居た。最後のシーンでちゃんと五人揃ってた。この作品、女四人の中で明確な主人公を感じなかったけれど、主役は五人目のあなただったね。主役はいつも遅れてやって来るんだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

観劇後、東京から仙台に戻る中、実家の家族LINEが入る。姪っ子が幼稚園の行事で、町の施設のクリスマスツリーに飾りをしている写真。地元のメディアも取材に来ていたらしく、姪っ子がインタビューされてたと母親である私の妹からのメッセージと共に。ちょうどコロナ禍の始まりに生まれた彼女もすっかり大きくなり、春には小学生になる。小さな町にとって、子供たちは希望そのものだ。

過疎化が進んでいく東北。街全体で「終活」が進んでいる、と言った。

でも、どんなことにも「終わり」があれば「始まり」もあるのだ。

私が愛憎入り混じって生きている東北、「終活」が進む街だって、常に希望と隣り合わせなのだと思いたい。少なくとも自分の手の届く範囲でいいから、微かでも確かに希望があるのだと思いたい。過去の挫折や、東北という場所に引き戻されることも、全部まにまに受け入れ、不要な想いを手放しながら。決して簡単なことでは無いのだけれど。

夕方ごろ、仙台に到着すると、私は冬の東北の冷気を大きく吸い込んだ。人混みの中ではあるが、冷気は不思議と澄んでいて、やがて身体中に駆け巡り、透き通っていくのを感じた。

後日、花奏和音が✕で投稿した、十数年前の「ジグザグ」メンバーの集合写真を見た。みんな目つきも鋭く、輝き、漲っている。私の顎のラインもシャープだ。三十代半ばのいま、顔や腹のたるみで、重力や時間の流れには逆らえないことを身につまされている。何より、この腹周りの浮き輪を手放したくてもしようがないんだ。二十代には、この若さが永遠に続くと思っていたのにな。

この公演という通過儀礼を経て、みんなが人生の新しい巡りの中に入っていく。そしてまたそれぞれが、日々、選択の連続の中「ジグザグ」に蛇行していきながら、螺旋の軌道を描き続ける。その先にまた集まって公演を行うのか、散り散りになるのかもわからない。それはもう、時のまにまに、また会える日を願うばかり。

出来れば生きて会おうぜきつと。それじゃあ、「まにまにまた」。

追伸

長かったでしょう？

でも、どんなに長い文章にも、始まりがあれば終わりもあるのだ。